

床本 太夫が見る本

— 四世竹本相生太夫旧蔵資料を中心に —

はじめに

文楽の太夫が舞台上で浄瑠璃を語る時に使う本を床本という。床本は、大きな字で一頁に五行で本文が書かれており、本文の横には太夫が語るのに必要な「譜」が書き込まれている。床本が必ず太夫の前に置かれるようになったのがいつ頃からは、はっきりとしないが、神戸女子大学古典芸能研究センター所蔵の志水文庫にある浄瑠璃『つれづれ草』（延宝 9 年上演）の写本は、その形式から、現存する最古の床本と考えられている。センターは 2018 年 12 月に四世竹本相生太夫旧蔵資料を受贈た。その資料の大半は、近現代の文楽の太夫達が実際に使っていた床本である。

2019 年度最後の展示では、最古の床本・江戸時代の床本・近現代の床本と、「太夫が見る本」である「床本」に焦点を当てつつ、浄瑠璃関連の様々な本を展示する。

- ★解説中の「たゆう」は全て「太夫」と表記する。ただし、翻刻は原資料にならう。
- ★四世竹本相生太夫旧蔵資料には㊦、志水文庫には㊧を付した。

四世竹本相生太夫旧蔵資料について

センターが受贈した四世竹本相生太夫旧蔵資料の総数は 582 点である。いずれも四世竹本相生太夫の蔵書印（→）が押されている。その内訳を示すと、以下のようになる。

床本 260 点	丸本 24 点
稽古本 126 点(内 1 点は常磐津)	洋装本 35 点
文楽パンフレット 120 点	歌舞伎パンフレット 14 点
丸本のコピー 3 点	

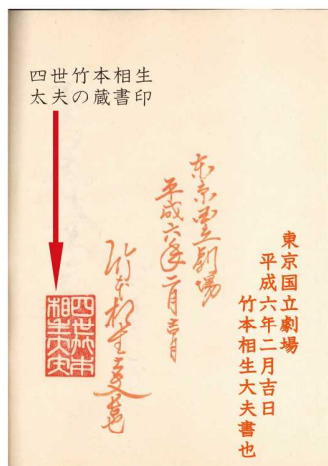
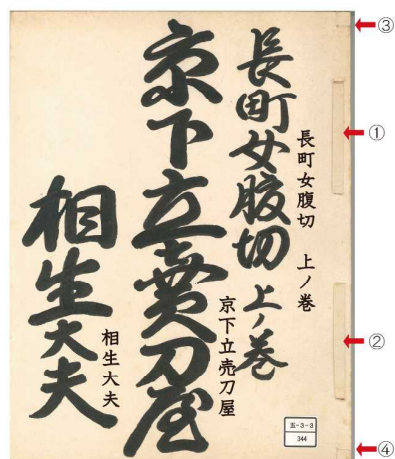


圧倒的に多いのが、文楽の太夫たちが実際に語る時に使っていた床本である。床本はほとんど全てがもちろん写本であるが、数点版本も含まれている。また、床本の定型サイズである大型の本ではないものもあり、床本のあり方を考える資料にもなりえる。また、加島屋から刊行された半紙本の稽古本も多数あるが、それらは朱で譜が書き込まれている。実際に稽古に使ったということであろうか。

ところで、「太夫たち」と書いたが、床本の表紙や奥書には、四世竹本相生太夫だけではなく、三世竹本相生太夫やその他の太夫の名前も記されていることが確認できる。奥書の年号は明治のものもある。また、奥書に、杉山其日庵（『浄瑠璃素人講釈』の筆者）と彼が後援した女義太夫竹本素女の名前が書かれた床本もある。

床本について

床本には、浄瑠璃の本文すべてが載っているわけではない。それぞれの太夫が語る部分のみが抜き出されている。四世竹本相生太夫旧蔵資料の床本を使って、床本の特徴を確認してみる。右は表紙の写真である。『長町女腹切』という浄瑠璃の上の巻の内、「京下立売刀屋」の場がこの床本には書かれていることが分かる。太夫は「相生大夫」。これは、下の写真に挙げた奥書から四世竹本相生太夫であることが確認で



ける。この床本は、平成 6 年 2 月 5 日から 20 日まで、東京の国立小劇場で行われた公演の際のものであることも、奥書から確認できる。

書かれている文字は非常に特徴のあるものだが、ほとんどの床本がこの書体で書かれている。文字は太夫が自ら筆で書く。これは本文も同様である。場合によっては、専門の書写者に依頼することもある。浄瑠璃

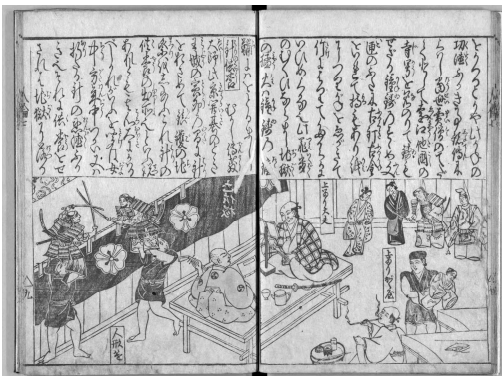
本文は墨で書く。本文を書き写した後、朱色で区切り点や節付を書き込んでいく。朱色で書くので、節付けのことを「朱」と呼んだりする。

床本の大きさは縦 28.4 cm、横 21.4 cm。かなり大ぶりの本である。この本は厚さ 8 ミリほどであるが、長丁場を一人の太夫が語る場合、床本は必然的に分厚くなる。床本は、普通の本より大きい上に、開けたり閉じたりを頻繁にするので、しっかりと綴じる必要がある。普通の和本は糸で綴じるが、床本は和紙を細く紐状に折ったもので綴じる①②。さらに上下の端を紙縫りで補強する③④。

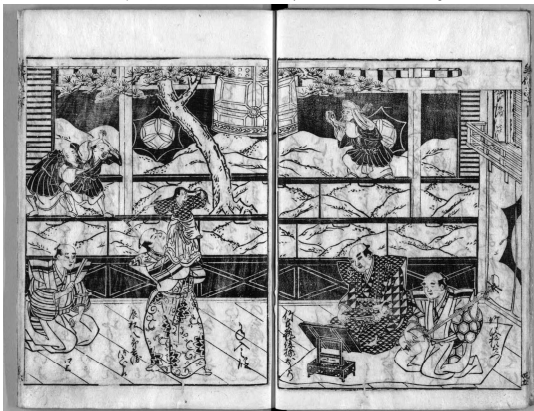
画証にみる太夫の姿

現在の人形浄瑠璃文楽では、語り手である太夫は、見台と呼ばれる台の上に床本を載せ、それを見ながら浄瑠璃を語る。本を見ながら語るのは、世界的に見て変わった形式らしい。日本では、最初から浄瑠璃の太夫は、床本を見て語っていたのだろうか。堂本家蔵『四条河原遊覧図』では浄瑠璃内記座の様子が描かれているが、背後で浄瑠璃を語っているのは女太夫で、おそらく出語りの様子である。出光美術館蔵『江戸名所図屏風』では舞台の後ろで腰を掛けて語っている太夫が描かれている。こちらは出語りではない。しかしどちらも太夫の前には床本が置かれていない。

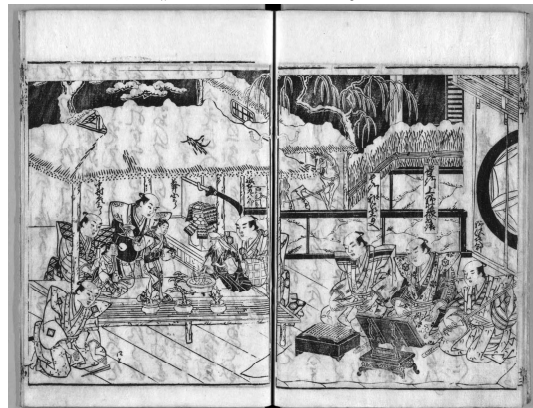
以下に挙げるのは、元禄頃からの画証である。残念ながら、寛永から元禄の間の太夫の姿を描いた画証はほとんど存在しない。元禄頃から、絵入り浄瑠璃本の見返しに、太夫の出使いの図が描かれるようになる。またいわゆる劇書が次々に書かれる中で、太夫の姿・見台・床本の様子をうかがい知ることが出来る資料がいくつか刊行される。



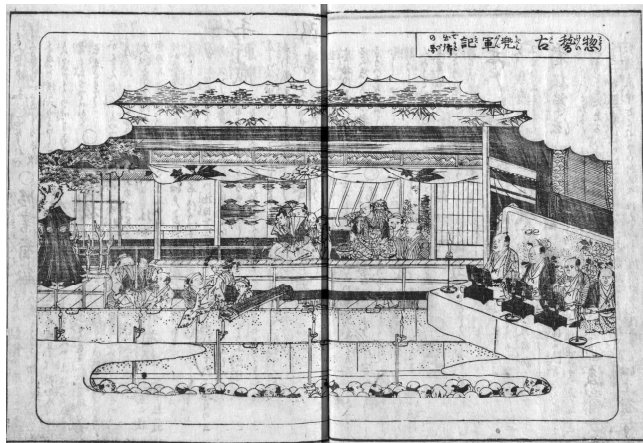
元禄三(1690)年刊『人倫訓蒙図彙』(国立国会図書館蔵)に載る山本角太夫一座の舞台裏。太夫の前には床本を載せた見台があり、膝元にも本が置かれている。



文政十(1827)年刊『牟芸古雅志』所載の『曾根崎心中』(元禄十六(1703)年上演)三十三所観音廻りの図。この図は絵入り正本の見返しに描かれている図の転載である。太夫の前には床本を載せた見台がある。



どちらも享保十二(1727)年刊『今昔操年代記』(国立国会図書館蔵)に載る舞台図で、左は竹本座の『用明天王職人鑑』(宝永二(1705)年上演)、右は豊竹座の『北条時頼記』(享保十一(1726)年上演)。やはり太夫の前には床本を載せた見台が描かれている。下の図の二人の太夫は見台の形が異なっている。左側の太夫はワキなので、簡易の台になっているのかもしれない。同様の図は外にもある。例えば右図は宇治座の『愛染明王影向松』(元禄末から宝永初年上演、霞亭文庫蔵)の出語り図。二人並ぶ太夫の前に置かれている見台は、どちらも箱形である。



左は享和二(1802)年刊『戯場楽屋図会拾遺』(志水文庫蔵)に載る舞台稽古の図。太夫三人が床で出語りをしている。三人とも同じ形の見台を使っている。右は文化十四(1817)年刊の合巻『艶姿歌妓結』(国立国会図書館蔵)の挿絵。太夫が座る床は文中に「浄りゆかの下よりおし出すなり」とあり、使うときだけひっぱり出したらしい。床の下に車がついているのがわかる。

竹本相生太夫代々

センターに寄贈を受けた「四世竹本相生太夫旧蔵資料」は、四世相生太夫自筆の床本や彼が収集したものだけではなく、師匠であった三世相生太夫から受け継いだものも多い。初世から四世までの相生太夫は以下の通りである。

初世相生太夫 (天保4(1833)年12月～明治34(1901)年9月2日)

大阪生まれ。三代目竹本長門太夫門弟

二世相生太夫

(弘化5(1848)年1月～明治44年2月18日)

京都生まれ。竹本山城掾門弟。明治6(1873)年二世相生太夫、明治21年四世竹本組太夫、明治23年竹本相生太夫、明治40年竹本綾太夫と改名。

東京では都賀太夫・朝太夫と共に艶物の名手であった。「卅三間堂」平太郎住家・「明烏」山名屋・「堀川猿廻し」「酒屋」が得意。優美な艶に加えて「和田四郎」のドスも利き、三枚目の「彦六」・おかしみの「与次郎」・老人の「宗岸」もよかった(『義太夫年表』明治編)

三世相生太夫 (明治21(1888)年7月23日～

昭和51(1976)年7月6日)

東京日本橋の生まれ。祖父が二世相生太夫。「15才で豊澤雷助の手解きをうけ、小若太夫の名で定席に出る。明治44年5月来阪三代越路太夫に入門、三代目越代太夫を名のる。大正9年5月三代相生太夫

☆八月 竹本相生翁(本名・三輪一郎、元文楽協会大夫、文楽協会評議員)は老衰のため七月六日、大阪府堺市南半町の自宅にて死去。八十七歳。東京都出身。密葬は七日自宅で行われた。文楽協会葬は二十六日、午後二時から大阪府西区江戸堀北通の金光教玉水教会で行われた。佐伯文楽協合理事長はじめ、大阪府知事、大阪市長、文化庁国立劇場関係者が参列した。引退したとはいえ、相生翁の人徳がしのばれた。喪主は四代目相生太夫。

相生翁は豊竹山城少掾と並んで江戸っ子でありながら義太夫の大夫として大成した人。明治四十四年三代目越路大夫に入門、越代大夫で初舞台。大正九年五月に御霊文楽座の「沼津」で三代目相生大夫を襲名した。昭和四十三年三月に重要文化財指定、文楽協会の大夫の部代表となった。綱太夫なきあと長老として後進をよく指導して来た。四十六年十月に不本意な引退興行となり、朝日座で「新口村」を語った。しかし四代目相生大夫の誕生ですっきりした興行になった。「引窓」などの世話物もよく、亡くなった中村福助(高砂屋)は「寺子屋」の源蔵を演じる時、山城少掾と相生翁の二つをきいて「山城さんのほきき浄り」で、相生はんのは芝居で出来る浄り、つまり、源蔵は人柄を表現するよりも、ことばの芝居ということを相生はんは判らせてくれました」とも言及したという。つまり相生翁の語り口は地味ながら説得力があったのだ。偶然に亡くなる二日前に、NHK第一ラジオで、相生翁の「先代萩」を放送した。「御殿の場」である。それをききながら私は政岡のさわりのくだりで涙が出るほど感動した。

(川松治氏記)

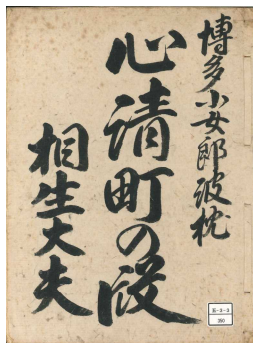
『上方芸能』48号掲載の三世相生太夫計報

襲名」(『義太夫年表』大正篇)。昭和 46(1971)年引退して竹本相生翁を名のる。
三世相生太夫については、『上方芸能』48(1976年9月)に載った訃報が詳しい。

四世相生太夫(昭和 14(1939)年 1 月 22 日～平成 11(1999)年 3 月 26 日)

愛媛県松山市の生まれ。昭和 28(1953)年三世相生太夫に入門し、相子太夫を名のる。昭和 46 年三世相生太夫引退に伴い四世を襲名。(四世については別記)

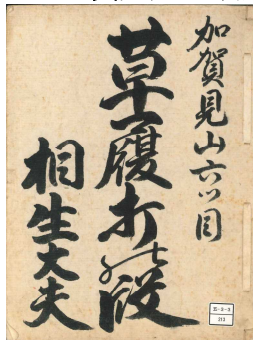
三世竹本相生太夫



1 博多小女郎波枕 (五-3-3-350) ㊤

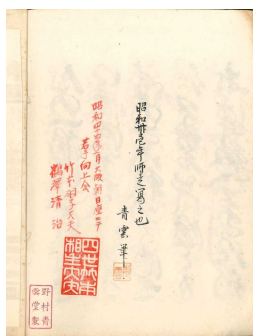
外題
博多小女郎波枕 心清町の段
識語 昭和卅貳年四月寫之也
青雲筆

2 加賀見山旧錦絵 (五-3-3-213) ㊤



外題
加賀見山六ツ目 草履打の段
識語
昭和卅老年師走寫之也青雲筆
昭和四十四年一月大阪旭座ニ
テ若手向上会 竹本相子太夫
鶴澤清治

備考 裏表紙見返しに「昭和
三十二年元旦初日」とある道
頓堀文楽座の番付を貼付。こ
の番付から、「草履打の段」
で竹本相生太夫が「岩藤」を
語っていることが確認でき
る。昭和 32 年なので、この
相生太夫は三世である。一方、
展示している識語部分には

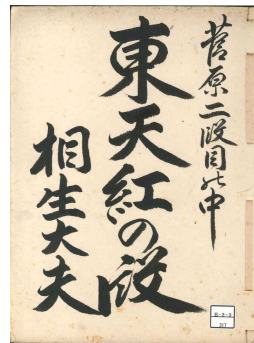


「昭和四十四年一月大阪旭座
ニテ若手向上会 竹本相子太夫 鶴
澤清治」とある。相子太夫は四世竹
本相生太夫の前名である。旭座は大
阪道頓堀の朝日座。昭和 44 年 1 月 20
日と 21 日に道頓堀朝日座で「第 5 回
文楽若手向上会」が行われ、相子太
夫が「加賀見山旧錦絵」の「草履打
の段」を語っていることは、『義太夫
年表』昭和篇第五巻で確認できる。

昭和 32 年に師匠が使った床本を譲り受けて(あるいは借りて)、弟子が語ったという状況が確認できるのである。識語から三世の床本であったと思われるが、表紙には「相子太夫」と記された床本は

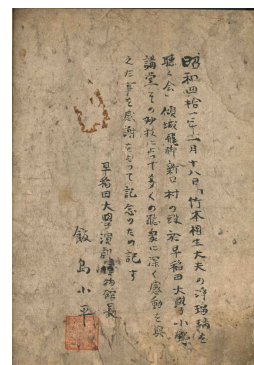
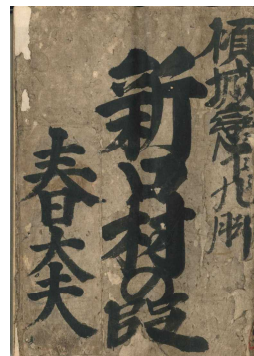
外にもある。

3 菅原伝授手習鑑 (五-3-3-317) ㊤



外題
菅原二段目の中 東天紅の段
識語 昭和卅三年四月寫之也
青雲筆
備考 裏表紙見返しに昭和三十三年四月廿六日初日道頓堀文楽座の番付貼付

4 傾城恋飛脚 (五-3-3-249) ㊤



外題 傾城恋飛脚 新口村の段
識語 昭和四拾壹年一月十八日「竹本相生大夫の
浄瑠璃を聴く会」傾城飛脚新口村の段於早稲田
大學小野講堂その妙技によって多くの聴衆に深
く感動を與えた事を感謝をもって記念のため記
す 早稲田大學演劇博物館長 飯島小平
備考 保護表紙太夫名 相生太夫、共表紙①三世
相生大夫 共表紙②(元表紙) 春大夫
元は春太夫(後の竹本摂津大掾か)の床本であっ
たらしい。裏表紙の書付により、早稲田大学の小
野講堂で「竹本相生大夫の浄瑠璃を聴く会」なる
ものが催されたことを知る。

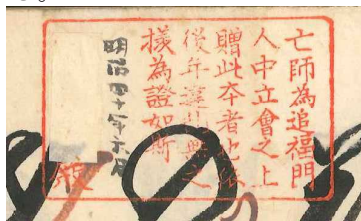
床本表紙の太夫名

床本の表紙には、浄瑠璃の題名や段名といっしょに、太夫の名前が大きく書かれている。四世竹本相生太夫旧蔵資料の場合、表紙に書かれている太夫の名前は、もちろん「相生大夫」が多い。ただし、この相生太夫は三世の場合と四世の場合が

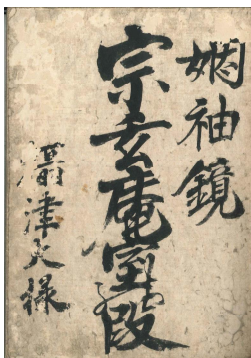
ありうる。また、もともと書かれていた大夫の名前の上に紙を貼って、新たに「相生太夫」と名前を書いていることもある。しかし、元の持ち主の名前をそのままにしている床本もある。こうした「相生太夫」以外の太夫で一番多いのは、「千駒太夫」の名前である。稽古本の中にも千駒太夫の名前が記されたものがある。ここでは、竹本撰津大掾・竹本彌太夫・竹本織太夫（二世）・竹本組太夫（五世）・竹本實太夫（五世）・竹本富子太夫・竹本小富太夫（二世）・竹本津太夫（四世）・竹本濱靱太夫と、相生太夫以外の太夫の名がある床本を並べた。

こうした古い床本のいくつかは、初丁表に下のような印が押されている。

亡師為追福門
人中立會之上
贈此本者也依
後年違乱無之
様為證如



5 姻袖鏡 (五-3-3-421) ㊦



外題 姻袖鏡 宗玄庵室の段
備考 表紙太夫名 撰津大掾
初丁に「亡師為追福門人中立會之上贈此本者也依後年違乱無之様為證如」の判。

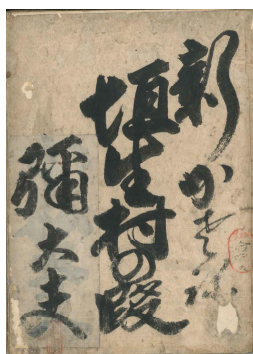
6 薫樹果物語 (五-3-3-403) ㊦

外題

新かさね 埴生村の段

備考 表紙大夫名 彌大夫。

初丁に「亡師為追福門人中立會之上贈此本者也依後年違乱無之様為證如」

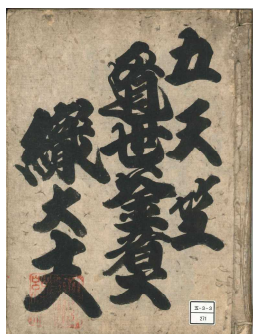


7 五天竺 (五-3-3-271) ㊦

外題

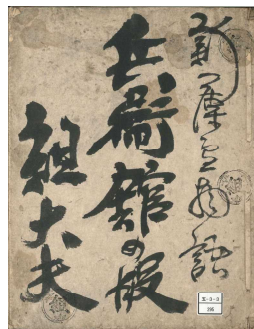
五天竺 通世釜煮のだん
識語 明治十九年戊三月吉日写之 松嶋文樂座にて廿九日初日四月廿一日楽日数廿貳日之間 十二番三弦野澤勝鳳

備考 表紙太夫名：織大夫（二世）



8 新薄雪物語 (五-3-3-295) ㊦

外題 新薄雪物語 兵衛館の段



識語 明治十九年一月卅日初日而二月十五日迄勤いなり彦六座ニ而三弦松太郎病氣ニ付團平詞章ニ而勤ル

備考 表紙太夫名：組大夫。

9 菅原伝授手習鑑 (五-3-3-316) ㊦

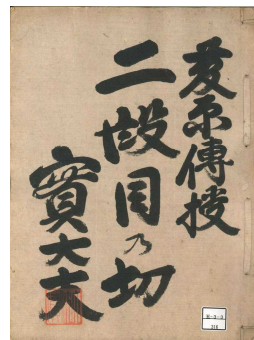
外題

菅原伝授 二段目の切

識語 大正六年巳の五月一日新京極竹豊座ニテ相勤ル 竹本撰津大掾門人竹本鳴門太夫筆 五代目竹本實太夫改名京都市新京極竹豊座ニ而相勤ル 三味線 野澤槌之助

備考 表紙太夫名 實太夫。

新京極竹豊座の番付貼付

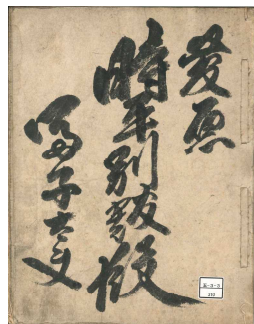


10 菅原伝授手習鑑 (五-3-3-310) ㊦

外題 菅原 時平別館段

識語 明治四拾四年 御霊文樂座ニ出て二月廿一日より相つとめ候 月 日迄 三味線 鶴澤三吉

備考 表紙大夫名 富子太夫

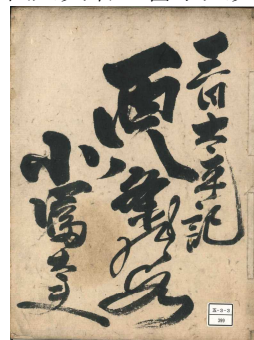


11 三日太平記 (五-3-3-399) ㊦

外題

三日太平記 西八条の段

識語 明治四十五壬子年六月吉辰石倉氏ノ應需 □香齋
備考 表紙大夫名 小富大夫



12 春姿浮れ面 (五-3-3-366) ㊦

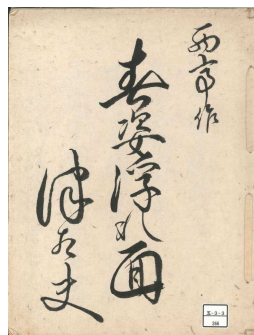
外題 春姿浮れ面

備考 表紙大夫名 津太夫

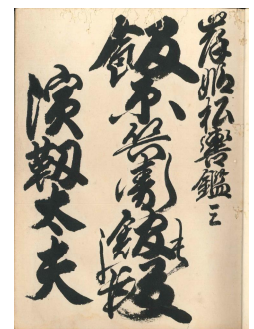
13 岸姫松轡鑑 (五-3-3-242) ㊦

外題 岸姫松轡鑑三

飯原兵衛館の段



備考 表紙太夫名 濱靱太夫。保護表紙には「岸姫松三濱靱太夫」。太夫名は貼付。



杉山其日庵と竹本素女

14 祇園祭礼信仰記と15 ひらかな盛衰記の識語には「其日庵主人」という名が見える。其日庵主人とは、杉山其日庵こと杉山茂丸のことである。杉山茂丸は、明治・大正期の政治運動家、実業家である。一方で義太夫節への傾倒が甚だしく、自身も義太夫を語り、また義太夫節に関わる著述も残る。特に有名なのが『浄瑠璃素人講釈』（大正15年刊）である。この本は竹本撰津大掾や三代目竹本大隅太夫からの聞書を評釈を加えつつ記述したもので、明治三十年代の文楽の様がよく窺える。なお、作家夢野久作は其日庵の息子である。

14の識語に見られる「竹本素女」は、其日庵の後援を受けていた女義太夫の太夫である。素女の伝記である守美雄著『素女物語』（蒼林社、昭和29年）には、其日庵と素女との出逢いなどが詳しく書かれている。昭和10年11月、竹本素女は歌舞伎座で、其日庵の追悼義太夫会を開催している。

杉山茂丸は元治元(1864)年8月15日、福岡藩応接方杉山三郎平(灌園)の長男として生まれた。漢学に造詣の深かった父の影響で幼い頃から漢籍に通じ、またルソーの民約論等に多大の影響を受け、同郷の政治結社玄洋社とも接触した。

(岩波文庫『浄瑠璃素人講釈』解説より)

竹本素女 本名正井ノブ。明治18年8月12日生まれ、昭和41年5月9日没。大阪で生まれ、最初は二世野澤錦糸の手ほどきを受ける。後に三世竹本越路太夫・三世鶴澤清六ほかに師事。大正3年東京発おめみえ。昭和10年から18年まで歌舞伎座で素女主催の会を開き続ける(戦後再開)。昭和25年、女流義太夫連盟結成、上野本牧亭での女義定期公演の基礎を築く。

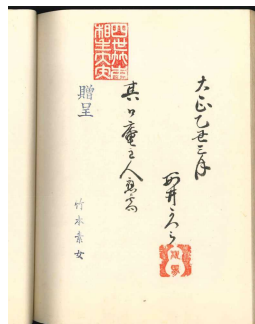
(参考資料：〈演芸資料選集・7〉)

水野悠子編著『娘義太夫一人名録とその寄席一』)

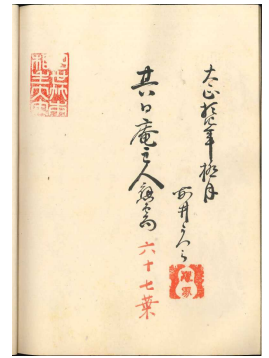
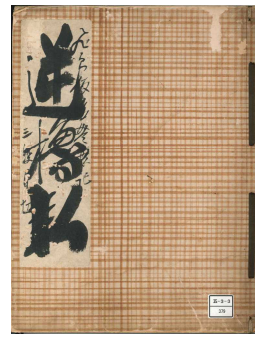
14 祇園祭礼信仰記 (五-3-3-241) ㊦



外題 信仰記 金閣寺ノ段 (保護表紙)
識語 大正乙丑三月安井かつら
其日庵主人應需。贈呈 竹本素女



15 ひらかな盛衰記 (五-3-3-379) ㊦



外題 ひらかな盛衰記 逆櫓段
識語 大正拾四年極月 安井かつら
其日庵主人

四世竹本相生太夫

(写真は文楽協会提供)

昭和14年1月22日 生

昭和28年9月

三世竹本相生太夫に入門 竹本相子太夫を名のる

昭和29年1月

「寿式三番叟」「義経千本桜道行初音旅」

「東海道中膝栗毛」千松で初舞台

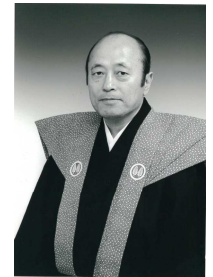
★この時同じく初舞台を踏んだのは、二世竹本津の子太夫・鶴澤清治・竹澤団二郎

昭和46年10月

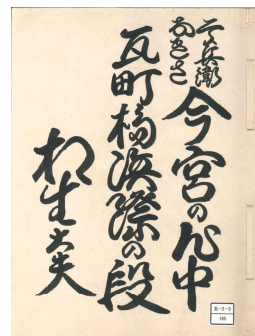
四世竹本相生太夫襲名

(演目) 染模様妹背門松、義士銘々伝、玉藻前囃袂、三世竹本相生太夫引退・四世竹本相生太夫襲名披露口上、恋飛脚大和往来 新口村 (前：相子大夫改め竹本相生大夫・野澤錦糸、後：三世相生大夫改め竹本相生翁・鶴澤重造)、増補忠臣蔵

平成11年3月26日 没



16 今宮心中 (五-3-3-185) ㊦



外題 今宮の心中

瓦町橋浜際の段

識語

平成十年正月吉日写也

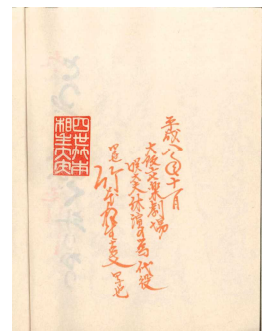
四世竹本相生大夫

17 菅原伝授手習鑑

(五-3-3-315) ㊦

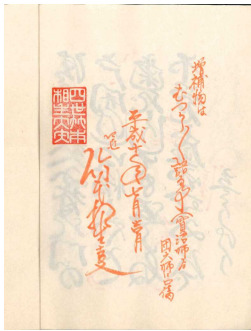
外題 菅原伝授手習鑑

貳段目の中



識語 平成八年十一月大阪文楽劇場 咲太夫休演
の為代役 四世竹本相生大夫写也 (朱書)

18 大江山の鬼退治 (五-3-3-204) ㊦



外題 大江山の鬼退治
渡辺綱屋敷のだん

識語

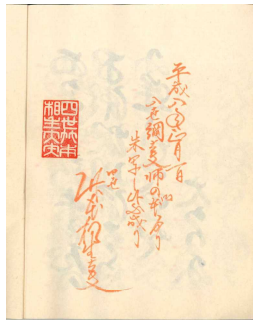
増補物はむつかし／＼語る事
(寛治師より団六師に口傳
平成十年七月吉日 四世竹本
相生大夫

19 心中天網島

(五-3-3-300) ㊦

外題 浮名の蜷川

識語 平成八年正月一日 八
世綱大夫師の御本より朱写し
候ふ成り 四世竹本相生大夫



浄瑠璃のテキスト

床本は、太夫が見る本であり、基本的には手書きの写本である。全段通しで書かれているものではなく、それぞれの太夫が語る部分のみが抜き出されて書かれている。こうしたプロが語るための本ではなく、一般の浄瑠璃愛好家が読むための本が、近世通じてたくさん刊行されている。版本の浄瑠璃本の現存するもっとも古いものは、寛永10(1633)年五月刊の『とうだいき』である。浄瑠璃の全段を刊行した本を、丸本あるいは正本と呼ぶが、浄瑠璃本における「正本」という言葉のもっとも古い例もこの『とうだいき』である。

版本の浄瑠璃本の本文は、最初の頃は1頁に12行から18行ほどの非常に細かい字で書かれていた。字が非常に細かいので「虱本」などとも言う。節付けはほとんど書かれていない。ただし、挿絵入りの物が少なからずあった。こうした中で、浄瑠璃の稽古にも使えるようにと、1頁8行で本文の横に文字譜・ゴマ譜を付けた形の浄瑠璃本が刊行されるようになる。これを始めたのは京都の古浄瑠璃の太夫宇治加賀掾である。『今昔操年代記』にそのことが書かれている。

あまつさへけいこ本の八行を。四条小橋つばやといへるに板行させ。浄るり本に謡のごとくフシ章をさしはじめしは此太夫ぞかし。

現存する最古の八行本は延宝7(1679)年刊、加賀掾の浄瑠璃『牛若千人切』である。同時期に京

都で活躍していた山本角太夫は、9行の浄瑠璃本を多く刊行している。その他、10行の本や12行の本もあり、挿絵入りの細字本も刊行され続ける。その後、浄瑠璃本の定型は8行から7行へと変化する。また、浄瑠璃本は半紙本で刊行されるのが一般的であったが、半紙本用の版木を使って、美濃紙に印刷した「献上本」と呼ばれる本も存在する。「献上」が誰に向けてなのかなど、この名称には問題点も多いが、美濃判(大本)の浄瑠璃本を献上本と呼ぶのは、通称として定着していると言ってよいだろう。

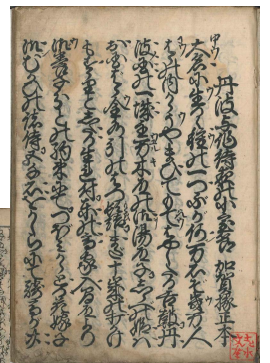
ここに展示した浄瑠璃本の20から24は古浄瑠璃の正本、25から28は義太夫節の正本である。古浄瑠璃の正本の内、20が八行本、21が絵入り本、22が十行本、23が九行本、24は佐渡で使われていた浄瑠璃の正本である(24は写本)。義太夫節の正本の内、25は絵入り本、26は六行本、27は七行本、28は献上本である。『曾根崎心中』の六行本は現存するのはこの本を含む3本のみである。28の献上本には朱で譜が書き加えられている。参考までに29に現在の床本の同じ場所を展示している。

20 丹波与作待夜の小室節 (五-3-2-67) ㊦

古浄瑠璃 八行本

宇治加賀掾正本

二条通寺町西入町/山本九兵衛刊



21 源三位頼政 (五-3-2-60) ㊦

古浄瑠璃 絵入り本 (十二行本)

宇治加賀掾正本

22 源三位頼政 (五-3-2-61) ㊦

古浄瑠璃

十行本

宇治加賀掾

正本。

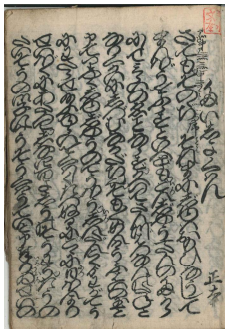
二条寺町西

入町 山本

九兵衛刊



23 大職冠 (五-3-2-76) ㊦

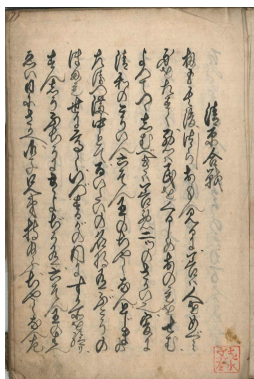


古浄瑠璃 九行本
山本角太夫正本
江戸通油町 鶴屋喜右衛門
京寺町通二條上ル町
鶴屋喜右衛門 板元

24 清原合戦

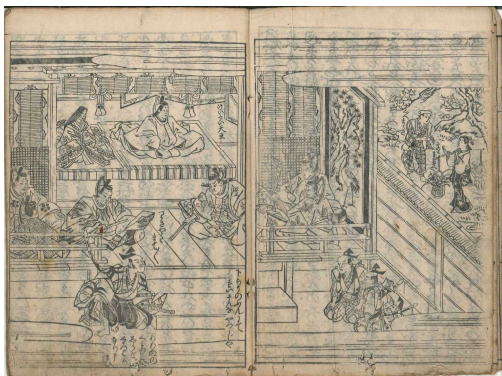
(五-3-2-114) ㊦

佐渡竹田説経座正本。
写本 中扉に「明治六(西)年西大川村東大川村/北大口村皮口村/清原合戦/九月大吉上日」。



25 和国女庭訓 (五-3-3-80) ㊦

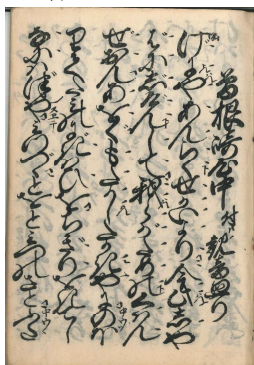
義太夫節絵入り正本 紀海音作



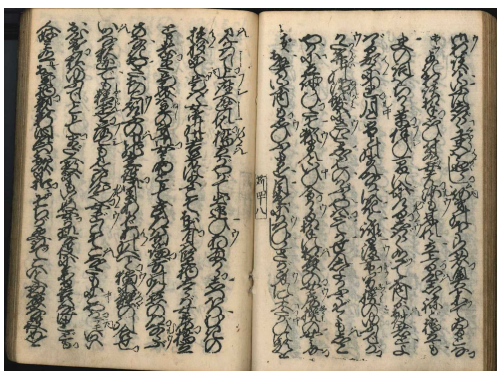
26 曾根崎心中 (五-3-3-580)

(外題)おはつ徳兵衛曾根崎名花森

義太夫節六行本
京二條通寺町 山本九兵衛版
江戸大傳馬町三丁目 鱗形屋孫兵衛版 大坂西横堀船町天満屋源治郎版
※細川景正文庫本、森修文庫本の六行本と同版。ただし後刷り。



27 苺萱桑門筑紫轢 (五-3-3-88) ㊦



義太夫節七行本

江戸大傳馬町三丁目 鱗形屋孫兵衛版、大坂心齋橋南、四丁目 西澤九左衛門版

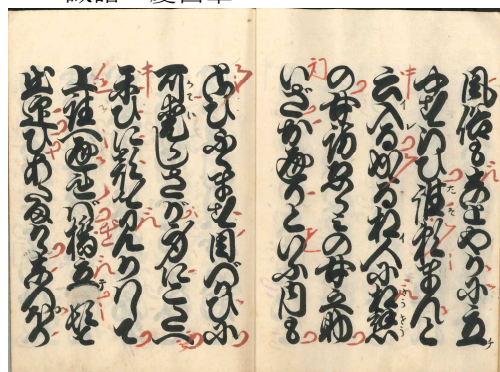
28 苺萱桑門筑紫轢 (五-3-3-87) ㊦

義太夫節献上本 七行本
大坂心齋橋南四丁目西側 正本屋九左衛門



29 (参考) 苺萱桑門筑紫轢 (五-3-3-238) ㊦

外題 苺萱 三段目切り
識語 慶昌筆



最古の床本

30 つれづれ草 (五-3-2-58・59) ㊦

外題 玉の觴(書写) 大本二冊

延宝9年(1681)宇治座上演の古浄瑠璃『つれづれ草』(別名「吉田兼好物語」)の床本。

浄瑠璃本文は五行で書かれ、節章や区切りを朱で示すが、これは現在の床本と同じ形式である。この本については、大橋正叔氏が『赤木文庫古浄瑠璃稀本集』の解題で、加賀掾による八行本の刊行などの行為と合わせて、詳しく述べられている。簡単に纏めると、以下ようになる。

- 八行本『つれづれ草』刊行の延宝9年5月にほど近い時期の書写
- 本文の書写は、書肆山本九兵衛専属かまたは加賀掾専属の浄瑠璃正本の版下書き
- 朱の節章は宇治加賀掾による
- 加賀掾が舞台上で使った床本、というよりは加

賀掾の（素人）弟子が稽古の為に使った床本
・後世に大量に刊行されるようになる抜本五行稽古本の源流

論の詳細については、参考図書の所にある『赤木文庫古浄瑠璃稀本集』を見られたい。

近年、京都国立博物館に寄託された資料の中に、近世の京都で活躍した仏師清水隆慶による宇治加賀掾の座像がある。座像の加賀掾は、袴を着けて見台の前に座る。見台の上には床本が置かれている。この資料の詳細な報告については、田草川みずき氏「新出資料・宇治加賀掾跋『八九杖』と「竹翁座像」について」（『楽劇』第20号、2013）がある。田草川氏は床本の文字や譜から、そこに加賀掾の関与を考察されている。あわせて、この座像の床本が六行である点、「床本は五行」という定型がこの時期まだ出来ていなかったことを示唆するのではないか。そもそも、太夫が舞台上で語る時に見台に床本を載せて語るという形は、画証資料等から延宝から元禄頃に定着したと考えられるが、床本の形式も確定していなかった可能性は高い。五行か六行か試行錯誤の過程を窺えるというのうがち過ぎであろうか。

床本の比較

31 と 33 は、横山正氏旧蔵の床本である。氏はこの床本を近世期の珍しい床本とされる。書型は大本で、本文を五行大字で書き横に譜が付されており、床本の形式であることは間違いない。ただ、30「つれづれ草」では譜は朱で書き込まれていたが、31と33は全て墨で書き込まれている。他に近世期の床本を未見であるため、現段階で氏の見解を肯定も否定もできる準備がないが、珍しい資料であることは間違いない。

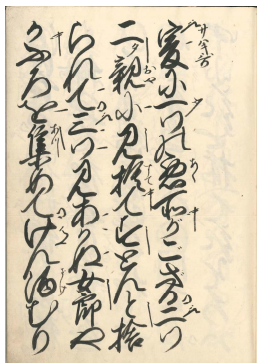
幸い、志水文庫に31の『男作五雁金』と33の『ひらかな盛衰記』の正本があるので、両者を比較することが出来るように並べてみた。また、『ひらかな盛衰記』については、四世竹本相生太夫旧蔵資料に同じ段の床本があるので、これも比較のために並べた。36は参考までに絵巻を置いている。

31 男作五雁金

(五-3-3-632)

越後町局炭火の段

江戸期の床本 横山正氏旧蔵。



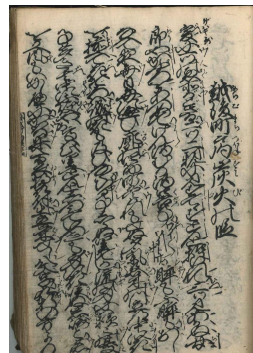
氏のメモに「男作五雁金」（寛保二年七月初演）の床本（越後町局炭火の段の全部）である。節附も文章も丸本（七行本）とほとんど同一（極く僅か異なる所あり）であり、初演頃の床本とみられる。この頃の床本の残ってあるものは少ない。（後の床本なら、節が丸本よりも複雑になってる筈である。）とある。

32 (参考) 男作五雁金

(五-3-3-95) ㊦

内題 江戸文七巻結
大坂文七巻屋 男作五雁金

京二條通寺町西へ入丁 正本屋山本九兵衛版、大坂高麗橋二丁目出店 山本九右衛門版、本文末尾に「寛保二戊歳七月二日」。



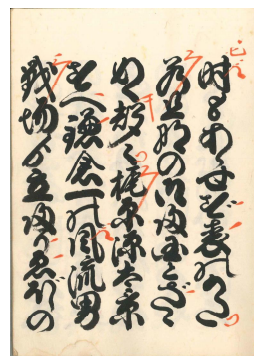
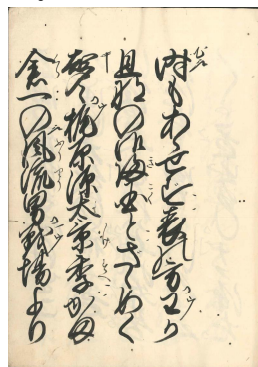
33 ひらかな盛衰記

(五-3-3-631)

二段目切 源太勘当の段

江戸期の床本 横山正氏旧蔵。

氏のメモに「ひらかな盛衰記」二段目切（梶原源太景季の帰館のところより）の床本。文句も節も丸本と一致（極く僅か節附の異なる所あり）するところからみるとこの曲の初演（元文四年）当時の床本とも考えられる。珍しいものである。」とある。



34 ひらかな盛衰記 (五-3-3-377) ㊦

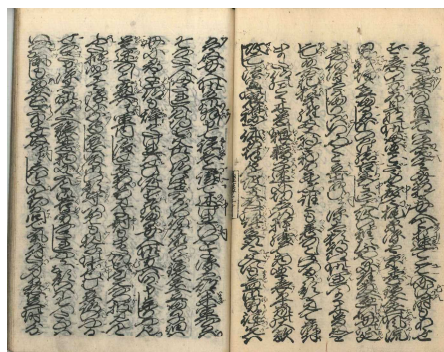
外題 ひらかな盛衰記 二段目の切

識語 昭和卅四年参月吉祥日寫之也 松隆筆

35 ひらかな盛衰記 (五-3-3-91) ㊦

外題 逆櫓松
矢櫃梅 ひらかな盛衰記

義太夫節七行本



36 (参考) ひらかな盛衰記 絵尽 (五-3-8-1)

㊦浄瑠璃『ひらかな盛衰記』初演は元文四年二月。慶應義塾大学所蔵の絵尽の見返には「古今大当り竹本播磨少掾 元文四歳末の卯月十一日より」と墨書がある。志水文庫の絵尽はこれと同版。



忠臣蔵七段目床本

基本的に、浄瑠璃は一人の太夫が一場全てを語るものである。情景描写・複数の登場人物のセリフなどを太夫が見事に語り分けるのを楽しむ。ただ、浄瑠璃によっては、複数の太夫が掛合をすることもある。有名なのは『妹背山婦女庭訓』三段目山の段であろう。この時には、下手にも仮の床が置かれ、上手と下手にそれぞれ二人太夫が座って、上手側の背山、下手側の妹山の登場人物を掛合で語る。『仮名手本忠臣蔵』の七段目もまた複数の太夫による掛合で浄瑠璃が語られる。七段目の場合は登場人物が多い。人形が退場してしまうと、その人形の語りを担当していた太夫も床から退場する。太夫の出入りがかなり頻繁な浄瑠璃である。

こうした掛合の場合、床本はどのようになっているのか。全ての太夫が七段目の全文を書き写した床本を持っているのではなく、それぞれの担当する役の部分だけが書かれている床本を使うのである。床本の表紙に「平右衛門拔書」「斧九太夫書拔」など「拔書」「書拔」と書かれているのはそういう意味である。

37 仮名手本忠臣蔵

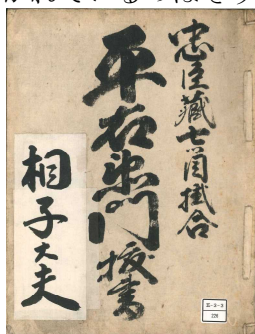
(五-3-3-226) ㊦

外題 忠臣蔵七ツ目掛合

平右衛門拔書

識語 昭和五年十月 吉祥日写

之也 松隆筆



38 仮名手本忠臣蔵

(五-3-3-227) ㊦

外題 忠臣蔵七段目掛合

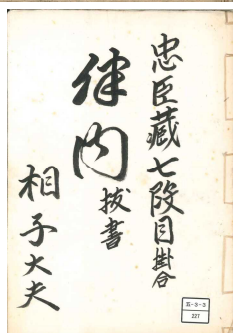
伴内拔書

識語

昭和三十五年一月二十五日

文楽座若手養生会 相子大夫

二十一才

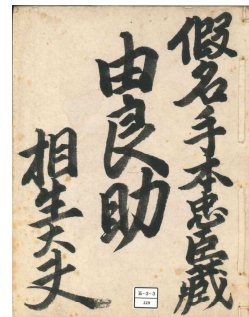
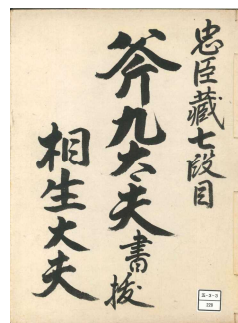


39 仮名手本忠臣蔵 (五-3-3-228) ㊦

外題 忠臣蔵七段目

斧九太夫書拔

識語 昭和卅四年十二月寫之也 青雲筆



40 仮名手本忠臣蔵

(五-3-3-229) ㊦

外題 仮名手本忠臣蔵

由良助

床本本文の書き手

現在、床本の本文は、各太夫が筆で書いている。四世竹本相生太夫旧蔵資料の床本も、四世相生太夫のものは全て末尾に朱で「四世竹本相生大夫写也」等の文言が書かれており(展示 17 参照)、本人が筆写していたことが確認できる。しかし、太夫ではなく専門の書き手が書いていた時期もあるようで、識語に「〇〇筆」「△△書写」などと書かれたものがある。床本の書き手のことなどは、八世竹本綱太夫の『芸談かたつむり』(布井書房、昭和41年)に詳しい。

四世竹本相生大夫旧蔵資料に見られる書き手の名前が一番多いのは「青雲堂」であるが、ほかに、森田萬楽・安井かつら・西岡南都・稲田松隆・農場慶昌・豊竹君太夫・かつら(哥都羅)・ふじい・沢槌之助・かすみ(順不同)などがある。青雲堂については、『芸談かたつむり』に、

現在の方ですと、元の三休橋におられた野村青雲堂のご主人が義太夫の本を書いております。

とあり、また安井かつらについては

それに変わった書風では安井桂という人がおります。同じ桂ですが、これは前に申しました桂とは違います。この人のものは必ず安井桂と書いてあります。東京に在住した方らしく、私どもが尊敬申し上げております義太夫の大通人である杉丸茂丸先生が愛好しておられました。(中略)杉山先生が安井桂に書かせた本は全部格子柄のような厚い紙の表紙がつけてあり、その表紙を見ると「ああこれは杉山先生の本だ」という事が判ります。

とある。ちなみに、四世竹本相生太夫旧蔵資料の

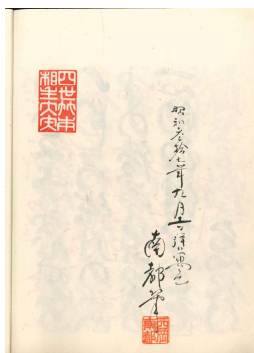
床本には、安井かつらの名が見える床本は 4 冊、内に 2 冊を 14・15 に展示したが、4 冊いづれも格子柄の表紙が付いている。

41 仮名手本忠臣蔵 (五-3-3-231) ㊤



外題
忠臣蔵九段目 山科の段
識語 農場慶昌筆

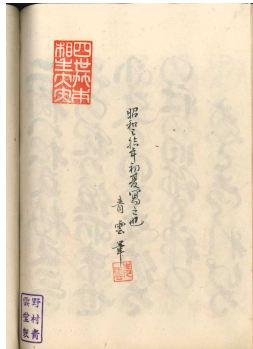
42 生写朝顔話
(五-3-3-285) ㊤



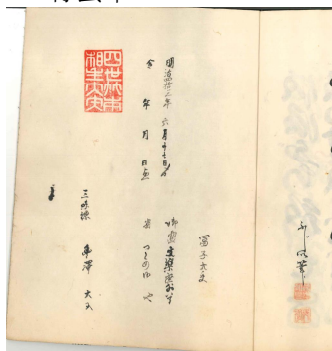
外題
朝顔日記 浜松小家の段
識語 昭和参拾七年九月吉祥
日寫也 南都筆
備考 表紙に「昌子」とあり、
上に紙を貼り「相生大夫」と
訂正

43 菅原伝授手習鑑 (五-3-3-318) ㊤㊤

外題 菅原 佐田村



識語 昭和三十拾年初夏寫之也
青雲筆



44 箱根靈驗覽仇討

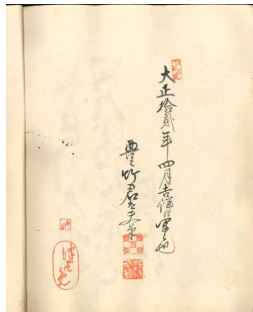
(五-3-3-352) ㊤

外題 箱根靈驗記 馬場先の段

識語 ふじい筆 富子大夫

明治四拾三年六月十七日より御靈文楽座おいて相
つとめ候也 三味線 豊澤大八

45 恋女房染分手綱 (五-3-3-259) ㊤



識語 大正拾貳年四月吉祥日
写之也 豊竹君太夫筆

識語さまざま

床本の識語には、誰が筆写したか以外にも、いろいろな情報が書かれている場合がある。誰から借りて写したか (19 「平成八年正月一日八世綱大夫師の御本より朱写し候ふ成り」、いつ上演したときの床本であるか、どう云うことがあったときの上演かなどで(47)、中には他の資料には見られない、演劇史に関わる情報が書かれていることもある。

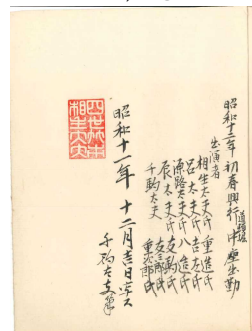
ここには、そうした変わった識語から数例を展示したが、今回の展示資料の中では、例えば4の表紙裏の識語や、17の「平成八年十一月大阪文楽劇場咲太夫休演の為代役」なども上演に関わる識語の例である。また18の「増補物はむつかし / \ 語る事 (寛治師より団六師に口傳)」なども面白い情報と言えよう。

47は昭和27年10月31日から11月14日、四ツ橋文楽座での興行の際の三世相生太夫使用の床本である。この時は毎日1時開幕の1回公演であった。この事は、番付等で確認できるが、「立太子禮慶祝全員、御客様と皇太子殿下萬歳三唱ス」などということは、番付には見られない生の情報である。

46 菅原伝授手習鑑 (五-3-3-314) ㊤

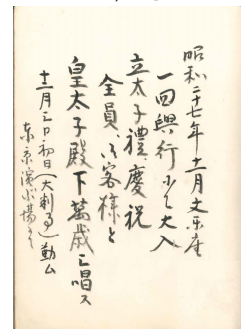
外題 菅原伝授手習鑑
道行戀の重荷

識語 昭和十二年初春興行道
頓堀中座出勤 出演者 相生
大夫氏重造氏 呂太夫氏吉左
氏 源路太夫氏八造氏 辰太夫
氏友駒氏 千駒太夫 友三郎氏
重次郎氏 昭和十一年十二
月吉日写ス / 千駒太夫筆



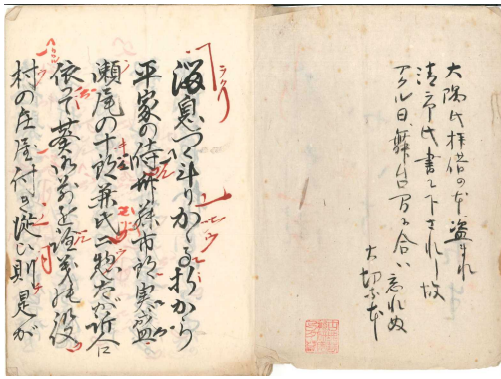
47 妹背山婦女庭訓 (五-3-3-190) ㊤

外題 妹背山三段目 大判事
識語 (本文前に) 昭和二十七年十一月文楽座一回興行とて
大入 立太子禮慶祝 全員、御
客様と皇太子殿下萬歳三唱ス
十二月三日初日 (大判事)
勤ム 東京演ぶ場にて



48 源平布引滝

(五-3-3-254) 外題 布引滝 かいな㊤
識語 表紙見返しに「大隅氏拝借の本盗まれ清市氏書て下されし故アクル日舞台間に合い忘れぬ大切な本」と墨書



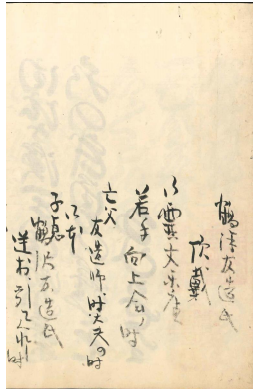
49 碁太平記白石噺

(五-3-3-266) ㊦

外題 白石噺 逆井村の段

識語 鶴澤友造氏頂戴 御霊
文楽座 若手向上会ノ時亡父
友造師時大夫の時御本 子息
鶴澤友造氏逆井引てくれし時
此本くたされた

備考 表紙太夫名 時大夫



文楽の新作

昭和30年代、文楽では次々と新作が上演された。その背景には、当時の興行主であった松竹株式会社の大谷竹次郎の意向があったらしい。その辺りのことについては、吉永孝雄氏『昭和の文楽』(和泉書院、1995年)に詳しい。

昭和三〇年代に新作がたくさん出たというのは、昭和三一年に道頓堀文楽座ができて入りが欲しい、それには年輩の人だけではなくて、若い人にもわかるようにしようという考えで、新作が出てきたんですわ。三一年八月の文楽座番付に「『昭和の文楽』づくり」と題した文を、松竹の大谷竹次郎さんが書いてはります。

この時期制作された新作の中には、「ハムレット」(展示53)や「お蝶夫人」(展示54)のような外国の物語をもとにしたもの、「春琴抄」(展示50)や「舞い茸」(展示51)のような文芸作品をもとにしたものなどがある。前者にはこの他に「椿姫」などもあり、後者には「夫婦善哉」などがある。また民話を題材にしたもの、例えば「雪狐々姿湖」(有吉佐和子作)もある。こうした新作の内、現在も再演されるのは、「春琴抄」「夫婦善哉」「雪狐々姿湖」くらいであろうか。「ハムレット」や「お蝶夫人」については、同じく吉永孝雄氏が

『ハムレット』なんかは「生きるべきか死ぬべきか」とか、皆が知っている名文句があるでしょう。あんなところが浄瑠璃でピシッと

ならへんですねん。『椿姫』でも「乾杯の歌」があるでしょう。オペラでアリアがありますね。それをいっぺんも『椿姫』を見たことなしに、「乾杯の歌」なんて知らん連中がやるんですよ。気の毒なやらおかしいやら、やっぱり合わんなどつくづく思った。

50 春琴抄

(五-3-3-283) ㊦

外題 春琴抄第四

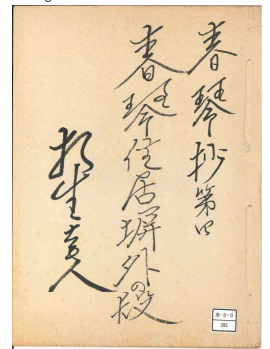
春琴住居堀外の段

備考 初演は昭和32年

識語 昭和61(1986)年8月

1日~17日 国立文楽劇場

場 四世相生太夫



51 舞い茸

(五-3-3-397) ㊦

外題：舞い茸

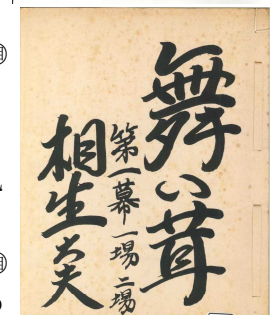
識語：昭和六十三年八月吉日

四世竹本相生大夫写也

52 京鹿子娘道成寺

(五-3-3-243) ㊦

これだけは、昭和30年代の新作ではない。長唄の義太夫節に移した「京鹿子娘道成寺」の上演は、江戸時代にすでに確認できる。



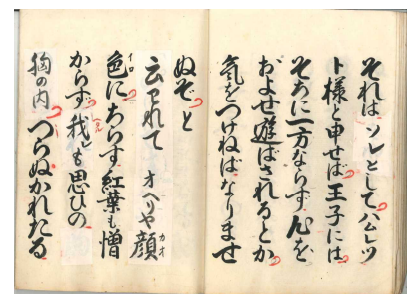
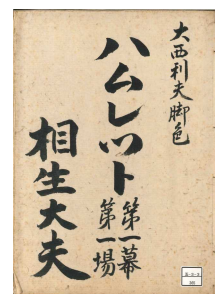
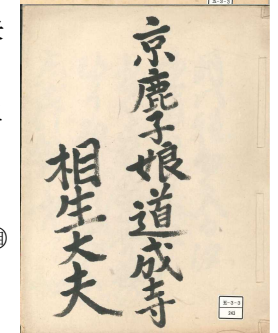
53 ハムレット

(五-3-3-365) ㊦

外題 ハムレット

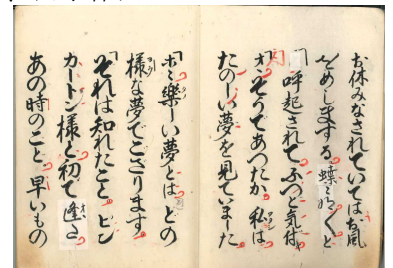
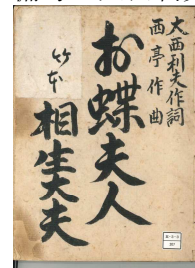
備考 大西利夫脚色

裏表紙見返しに昭和三十一年七月五日初日道頓堀文楽座の番付。



54 お蝶夫人 (五-3-3-207) 第二景㊦

備考 大西利夫作詞、西亭作曲



かえるはるみつのえもよう
55 還春三彩絵模様 (五-3-3-211) ㊦

外題

吉田文五郎翁の米寿を祝して
還春三彩絵模様

備考 昭和31年公演。表紙に「西亭脚色補曲」とある。

「還春三彩絵模様」は、西亭脚色補曲による吉田文五郎の米寿を祝う演目である。文五郎の米寿を祝う公演は、道頓堀文楽座の昭和31年正月公演から始まる。演目は「寿式三番叟」「米寿襲名披露口上」「絵本太功記 尼ヶ崎の段」「還春三彩絵模様」「三勝半七艶容女舞衣」「初旅夫婦猿」「本朝廿四孝」「延喜帝」「曲輪文章」。

文五郎はこの内、「寿式三番叟」で翁を、「還春三彩絵模様」でお染・禿・住吉踊りを「本朝廿四孝」十種香の段で八重垣姫を遣っているが、『文楽因会三和会興行記録』によると、過労のために途中休演をしたらしい。口上に「米寿襲名披露」とあるように、この時鶴澤清友改め鶴澤徳太郎、鶴澤寛治郎改め鶴澤寛治、竹澤寛弘改め竹澤団六の襲名があわせて行われている。また正月公演は、「新装開場 当る申歳柿葺落 文楽座人形浄瑠璃初春興行」と銘打っており、上記演目の内、「延喜帝」は開場記念狂言で、平田都作・鶴澤清六作曲・四世井上八千代振付・前田青邨美術考証並装置の新作である。

文五郎の米寿を祝う公演はその後、「米寿襲名披露口上」「還春三彩絵模様」以外の演目は変更しつつも、2月14日からは祇園甲部歌舞練所で、4月11日からは地方巡業で、6月6日からは渋谷の東横ホールで、10月3日からは再び地方巡業で上演されている（10月からの地方巡業では文五郎の役をお染と住吉踊りの2役にした「還春双草紙」を上演）。その間の4月29日に、文五郎は難波掾を受領している。三世竹本相生太夫は、大阪での正月公演と4月からの地方巡業で「還春三彩絵模様」を語っている。

文楽と歌舞伎

56 二人知盛 (五-3-3-388) ㊦

外題 二人知盛

備考 昭和15年8月3日から27日、歌舞伎座（東京）特別出演

「二人知盛」は、「新鋭大歌舞伎八月興行」と銘打った公演で初演された。作者は木村富子、演出

は市川定花、下の巻の作曲は鶴澤道八、振付は花柳寿輔で大阪文楽座の太夫三味線が特別出演している。出演した太夫・三味線は以下の通りである。

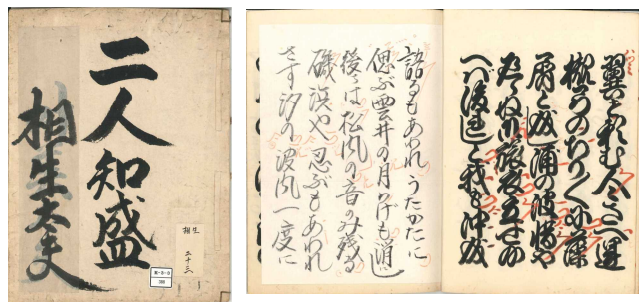
竹本相生太夫・竹本織太夫・竹本長尾太夫・豊竹辰太夫・豊竹千駒太夫

鶴澤道八・野澤吉五郎・竹澤団六・豊澤団伊三・鶴澤綱延・豊澤竜市

和布刈の神事の日、神事を司る門司ヶ関の早鞆明神の社人の前に平知盛の霊が現れて、神事にこと寄せて海松藻を刈ることを頼む（前半）。知盛の霊に憑かれたように社人も同じ姿となり、二人の知盛は連舞をする（後半）。以上が物語の筋である。よく似た親子であった二代目市川猿之助（初代猿翁）と三代目市川段四郎が同じ姿で踊るといのが趣向の演目であった。『歌舞伎座百年史』にはこの公演について以下のような記述がある。

第二が『二人知盛』で、喜熨斗父子が踊り抜く作品。大がかりな文楽の出語りがあり、「二人踊りぬくので、たゞ見てゐる分には面白いこうであったといわねばなるまい」（池田大伍）と。

昭和16年11月には築地東京劇場で再演している。この時も文楽座の太夫・三味線が特別出演している。ただし出演した太夫と三味線の顔ぶれは異なる。三世竹本相生太夫はこの公演には出演していない。後に三代目市川猿之助（二代目猿翁）が『澤瀉十種』の一つに加え、その披露の場でもあった昭和50年11月26日歌舞伎座での猿翁・三代目段四郎十三回忌追善の舞踊会で、弟の四代目市川段四郎と再演した。この時は新たに長唄で藤間勘十郎の振付で上演した。



57 新石橋 猛競壽獅子 (五-3-3-299) ㊦

外題：新石橋 猛競壽獅子

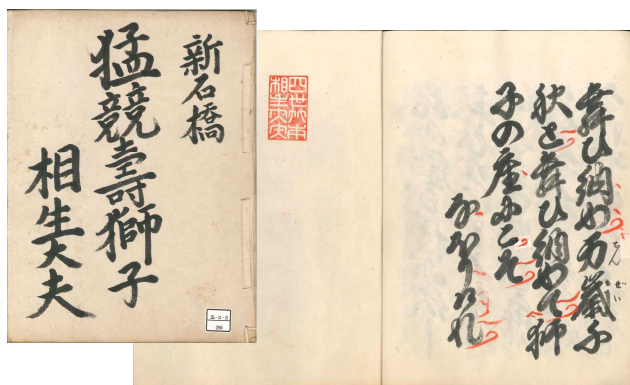
昭和32年6月1日から23日まで、大阪歌舞伎座で「歌舞伎座開場二十五周年記念興行大歌舞伎」と銘打って行われた興行の内、「猛競壽獅子」に文楽座太夫・三味線が特別出演した。出演した太夫・三味線は以下の通り。

竹本相生太夫・竹本雛太夫・竹本静太夫・竹本長子太夫・竹本相次太夫

野澤松之輔・野澤吉三郎・豊澤新三郎・鶴澤藤之助・豊澤豊助出演。

作者は九世片山九郎右衛門、作曲は杵屋勝太郎作曲と西亭、美術は矢野橋村、作詞は梅屋勝之輔、振付は坂東三津之丞、照明は岡田猪之介である。片山九郎右衛門は京都の観世流シテ方能楽師。芝刈童子（文珠菩薩）・白獅子を六代目坂東三津五郎（八代目坂東三津五郎）、寂照法師・赤獅子を二代目實川延二郎（三代目實川延若）が演じている。

開場二十五周年記念をうたった公演であるが、この年松竹株式会社は千日前にあった大阪歌舞伎座の閉場を決めている。大阪歌舞伎座での歌舞伎の最終公演は昭和33年3月であった。

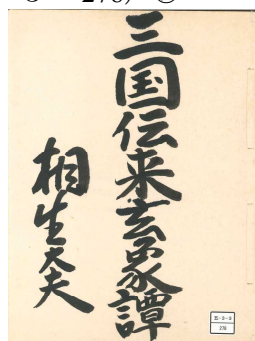


58 三国伝来玄象譚（五-3-3-278）㊦

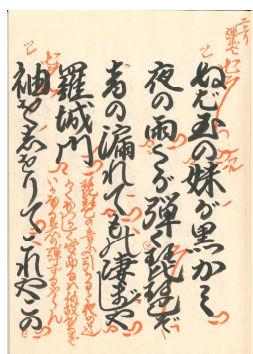
外題：三国伝来玄象譚

識語：平成五年十月一日初日～二十五日歌舞伎座 四世竹本相生大夫書也

夢枕獏作の新作歌舞伎である。主演は中村勘九郎（当時、後の十七世中村勘三郎）と坂東玉三郎。



天竺の沙羅姫（玉三郎）が楽人と長安に駆落ちし、夫の愛した琵琶玄象を追い、化生の姿となって日本に渡る。内裏に秘蔵された玄象を取り戻し、羅城門楼上にいるという設定である。我が子蟬丸（勘九郎）との再会があり、最後は桜花の中を昇天していくというのが大筋（『演劇界』劇評より）



文楽座連中として以下の太夫・三味線が出演している。
豊竹咲太夫・竹本相生太夫・竹本緑太夫・竹本南都太夫・鶴澤清介・鶴澤八介・竹澤団治・鶴澤清太郎

（参考展示）稽古本（版本）㊦

「稽古本」は、床本と同じように本文を五行で書き、細かく節を付けた本である。浄瑠璃一作品全てではなくて、一場のみを抜き出してある点でも床本と同じと言える。表紙には「床本」の字が見える。違うのは、本の大きさが半紙本あるいは小本であること、写本ではなくて版本であることの2点である。こうした本がいつ頃から刊行されるようになったのかは不明であるが、現存するのは山本九兵衛から浄瑠璃本の版権を取得した天満屋源治郎から刊行されたものが古い。その後、版権が移動した加島屋清助もこうした本を多数刊行している。これらの本は、抜本と呼んだり、プロの太夫たちが舞台上で語る時に使う床本ではなく義太夫節愛好家たちの稽古に使われた本ということで稽古本と呼んだりする。

四世竹本相生太夫旧蔵資料には、こうした稽古本も多数ある。そしてその多くは、ここに並べたとおりに朱の譜が書き入れてあったり、文章が書き足してあったり、貼り紙で訂正がなされていたりする。



「床本 太夫が見る本

—四世竹本相生太夫旧蔵資料を中心に— 目録

(2020年2月17日～3月31日)

神戸女子大学古典芸能研究センター展示室)

2020年2月18日公開

編集 神戸女子大学古典芸能研究センター

展示企画・図録作成 非常勤研究員 川端咲子

〒650-0004 神戸市中央区中山手通二丁目23-1